

2024年8月5日

説教題「光と闇、すべてを造られる主」イザヤ書 45 章 1～8 節

主任牧師 加藤 誠

**「光を造り、闇を創造し、平和をもたらし、災いを創造する者。わたしが主、これらのことをするものである。」
(イザヤ書45章7節)**

以前、あるセミナーで一枚の紙に「これまでの人生で大きな影響を受けた人や出来事を○で描いてください。大きな影響を受けたものほど大きな○で描いてください」と言われました。わたしが描いた一番大きな○はイエス・キリスト。次に障がい者が暮らすラルシュ共同体での経験と阪神淡路大震災の経験を○で大きく描きました。22歳で出かけたラルシュ共同体では、さまざまな障がいを持つ人々と寝食を共にする中で、神さまが与えられた人間の尊厳を学ばせてもらいましたし、34歳で遭遇した阪神淡路大震災では教会で近所の人々と避難生活を共にする貴重な経験をさせてもらいました。特に震災直後の数日、暗闇の中でローソクの光だけ見つめて過ごした時間は、人間の小ささや愚かさを見つめ、聖書の言葉と向かい合う貴重な時となったのです。

先週紹介したように「第二イザヤ」(40～55章)は、バビロン捕囚という暗闇の日々を過ごしていた人々に向けられた神の熱い語りかけです。深い失意に沈む人々に神は「恐れるな。わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな。わたしはあなたの神。わたしの救いの右の手であなたを支える」と語られたのでした(41:10)。

今朝の45章はその続きですが、ここには当時のイスラエルの人びとの信仰を大きく揺さぶる内容が語られています。その一つは10節「光を造り、闇を創造し、平和をもたらし、災いを創造する者。わたしが主、これらのことをするものである」という言葉です。神が闇や災いを創造するという言葉に私たちは戸惑いを覚えます。私たちはともすると神は光だけを造り、悪者が暗闇を造ると考えやすい。けれどもそうではない。例えばヨブは愛する子どもたちや財産をすべて失った時、「神は与え。神は奪う。主の御名はたたえられよ」と語りました。神は与えてくださる方ですが、私たちから奪う方でもあります。私たちが不安や恐れを覚える暗闇の中にも神は共におられ、その暗闇に神は隠された宝をおいておられる。イザヤはバビロン捕囚という暗闇の日々に、神の働きを見出し、神の隠された宝を見いだしていった人だったのです。

もう一つは1節「主が油を注がれたキュロスについて」語られている言葉です。キュロスはペルシャの王であり、その異邦人キュロスに神が「油を注がれた」。「油を注ぐ」とは神が「王」「救済者」として立てることを意味します。一方で、異邦人は神を知らぬ民であり、イスラエルに敵対し苦しめてきた存在。神がその異邦人を「王」「救済者」として用いられることは、イスラエルの人びとには受け入れがたく、衝撃的なことでした。2節以降を読むと、神はキュロスを「あなた」と呼び、「あなたの

名を呼び」、「あなた」を立て、青銅の扉を破り、鉄のかんぬきを折り、わたしの僕であるイスラエルを救済する働きをさせる。そのようにして、それまでわたしのことを「知らなかった」あなた（キュロス）が、わたしが神であることを「知ることになる！」と言われたのでした。これらのイザヤの言葉は、それまで「自分たちは神の民」、「異邦人は神を知らぬ敵」と最初から決めつけて考えてきたイスラエルの人びとの固定概念を大きく揺さぶり、打ち破るものだったのです。

神に「光と幸い、平和」だけを見て、自分たちに暗闇や災いをもたらすものを「悪」「敵」と考える。自分たちを神の側、善と光と考え、自分たちに敵対する者を悪と暗闇と見なしていく。自分を正しいと同定し、相手を間違いだと決めつけていく。そのように二元的に世界を見ていくとき、そこに戦争が生まれていきます。ある国の指導者が自分を「神に選ばれた者」と呼び、敵対する者を「悪魔」「狂った者」と非難していく。そのような非難の応酬が愚かな戦争を生み出し続けるのです。

私たちが光や平和、幸いを感じるところだけに神さまを見るのではなく、暗闇や災いの中にも働かれる神を見ていく。異邦人たちを悪者と安易に同定したり、自分たちを神の側と安易に同定しない。自分たちには「敵」に見える異邦人をも用いて、私たちが愛と平和に導かれる主なる神の自在な働きを見つめ、畏敬をもって礼拝していく。私たちの小さな「神概念」をはるかに超えて、大きく自在に働かれる「主なる神」を共に賛美する信仰に、イザヤは人びとを熱く招いたのでした。

東工大教授だった乾正雄さんの『夜は暗くてはいけないか』という本は、高度経済成長の時代に、どこもかしこも光が繁栄の象徴として夜も輝き続けている状況に疑問を投げかけ、「暗い夜」「暗さ」の価値を見直している本です。「夜が暗い方が良い…もっともだいな理由は、暗さが人にもものを考えさせる、ということだ」「光の行き渡りすぎた現代の夜間が、人に常に動き回ることを強いて、じっと考える力を失わせたことは疑いようもない」「暗さの中で、太古の人間は悩みと不安、恐怖などを知ったであろうし、はたまた、死とか、終末とか、来世に思い至ったであろう。そこから哲学や宗教が生まれた。暗さは、人にもものを考えさせるのだ」。

バビロン捕囚という暗闇の時代に旧約聖書の信仰は成立しました。暗闇の中でイスラエルの人びとは「神が光あれと言った。すると光があった」という信仰を深められたのです。新約聖書でも、イエス・キリストの十字架という暗闇を通してこそ真実の希望に弟子たちは導かれていきました。私たちが生きること、働くこと、私たちが味わう喜びや悲しみ、そのすべての根底に神の働きかけ、神の業があることに目覚めた時、人ははじめて災いも深い闇も意味あるものとして受け入れることができるようになります。どんな混沌の中でも、すべてを造られた神の「光あれ」という言葉を聴いていくなら、その混沌によって私たちの人生がむなしく崩れ去ることはないのです。

